吉岡進の釣りを楽しく感じるままに

E2F

Enjoy Every Fishing no.06

茨城県日立沖のスロジギ

★この男、やはりタダモノではない……。
1番バッターが初回の初球で
場外ホームランをかっ飛ばすかのような、
会心の一撃。
プロが本気になると、大ビラメも敵じゃない。
スローピッチジャークジギングで狙う
日立沖のヒラメは、ヨッシーの前に
白旗を揚げるしかなかった

文◎高橋 剛／撮影◎本誌編集部

薄曇りから雨、そして晴れ。安定して好天が続くはずの真夏にしては、目まぐるしく天気が変わる8月22日だった。

第二海神丸は、突き抜けるような青空の下、沖揚がりを迎えて今まさに港に戻るところだ。その船上で、珍しくヨッシーが爆睡している。

ヨッシーこと吉岡進さんはジャッカルのプロスタッフであり、言うまでもなく当企画「エンジョイ・エブリー・フィッシング（E2F）」の主役である。

主役の爆睡。釣りを終え、港への帰途とはいえ、あまり見ない光景である。プロ意識が高いヨッシーが、船上で眠りこけることは（ほぼ）ないのだ。

しかし茨城県日立会瀬港の第二海神丸に揺られるヨッシーの寝顔は、極めて満足気で、その眠りはあまりにも深かった。

いったい、何が――？

明暗を分けたロッド選び 使用ジグとのバランスが大事

ヒラメ狙いのスローピッチジャークジギング（以下スロジギ）を終えた第二海神丸が舳先を日立会瀬漁港に向け、ヨッシーが深い眠りに落ちたのは、沖揚がりの正午ちょうどだった。

時を戻そう。その1時間前の11時――。

E2F取材班のトモキこと板倉友基さんが、「やった！」と大きな声をあげた。

トモキは釣りの名手だが、この日はなぜか不調だった。本命のヒラメがなかなか釣れない。

ヒラメ狙いのスロジギは、決して難しい釣りではない。少なくとも、手練れのトモキが苦戦するはずはないのだ。

スロジギは、いわゆる青物ジギングのようにハードにジャーク（竿をシャクること）させる必要はない。アクションは基本的にスロー。体に優しく、イージーな部類に入る釣りだ。

とは言っても、注意すべき点はいくつかある。なかでも重要なのは、竿だ。

トモキは今回、フルソリッドのかなり軟らかい竿と、スロジギ用のやや硬めの竿の2本を持ち込んでいた。

一般的にスロジギは専用竿を使う。シャクったとき、粘っこくジワッとジグを持ち上げるような竿だ。これならジグが必要以上に飛びすぎない。

▲ポイントへ向かう途中、日立の海に虹がかかる

ヒラメのように泳ぎが得意でない魚には、食い気を誘えるうえにちゃんと追いつくという、ちょうどいい動きになる。

一方、硬い竿だとメリハリが付きすぎ、ジグが海中で横っ飛びしてしまう。するとヒラメが追いつけないことになる。

どれぐらいジグを飛ばせばいいかは、魚の活性や海況によるところが大きく、正解はない。釣りをしながら、答えを探し求める。これがスロジギのだいご味である。

そしてジグの動きは、竿の調子によるところが大きい。トモキが持ち込んだ竿は、2本ともなかなか難しいものだった。フルソリッドは軟らかすぎて十分にジグを飛ばせず、スロジギ用はやや硬く、ジグが飛びすぎた。

「最後のほうはあまりジグが動かないようにシャクリ幅を控えめにしたんです。それでやっとヒラメが釣れました！」

正解を突き止めたときには、釣り開始から実に5時間半が経過していた。まさに値千金のヒラメ。スロジギの奥深さと面白さ、そして怖さを改めて痛感したトモキなのだった。

ちっさ～

下見しておいてよかった

◀ビッグチャンスを逃してしまったタカハシゴー

▲プラクティスのおかげで良型ヒラメを筆頭にタチウオ、クロソイ、オキメバル、イナダを釣り上げ五目達成

着底したらスローにシャクリ 底から10メートル上まで探る

スロジギを妙に得意としているのが、イチロウこと鹿島一郎さんである。

もともと本誌にはイソメマンとして登場し、何釣りにおいてもむやみやたらとアオイソメを使うことで知られた彼だが、今やすっかりルアーマンである。

なかでもスロジギにおいては、毎回のように目覚ましい釣果を上げている。

「うーん、得意って意識はないけど、なぜか釣れましたね～。なんでかな～？」と本人は首をかしげる。

ここで、スロジギをヨッシーに解説してもらおう。

「第二海神丸が狙うポイントは水深40～50メートル前後。潮はそれほど速くない海域だから、ジグの重さは120～150グラムでいいと思う。

ジグを落として着底したら、すぐにリールを数回巻いて底を切り、竿先をシャクリ上げて止める。竿の反発でジグが持ち上がってから、ピッと竿先が止まるはずだ。その瞬間、ジグは横を向いているんだ。これが食わせの間になるんだ。

そして竿先を下げながら、リールのハンドルを4分の1～2分の1回転させる。また竿先をシャクリ上げて、竿先が止まる。食わせの間ができる。竿先を下げながらリーリング。これの繰り返しだ」

簡単に言えば、竿先を上下させながらリールを巻くだけだ。竿先を下げている間は、ジグがフォールしている。ヒラヒラとした落下が魚の食い気を誘う。竿先を上げ、しなりがピッと止まったときジグが横を向く。その瞬間、魚がジグに襲いかかるのだ。

イチロウは、これを淡々と繰り返し続けた。これがどうも功を奏しているようだ。

「ほぼ同じことを繰り返すだけの釣りなので、逆に集中できるんですよ」とイチロウ。

「ほかの釣りだと、結構色んなことを試したくなっちゃって、結局何がなんだか分からなくなりがちなんです。

でもスロジギは、いい意味でやれることの幅が少ない。その中での工夫、ということになるから、集中力が途切れないんだと思います」

イチロウが使用したジグは、バンブルズジグ スロー。メインカラーは、確信を持ってセクシーブルピンを選んでいる。

実はイチロウ、5日前に下見のため第二海神丸に乗船している。そのときはかなりの難コンディションで、沖揚がり寸前まで丸ボウズという苦境だった。

色いろとアクションを変えても、海からは返事がない。最後の最後に「ジグの色でも替えて

▲最後にようやくヒラメを釣りひと安心